

***射場天体観測所一覧を収蔵—その2—**

アーカイブ室新聞第662号(2013年1月18日)に「射場天体観測所一覧を収蔵—その1—」という記事を書いた。射場保昭氏は「明月記の客星出現の記録を英文で海外に紹介した日本人」として知られており、昭和3年(1928年)に神戸市に私設天文台「射場天体観測所」を開設された。射場天体観測所の機材は当時の天文観測機材としては内外でも有数のものであった。

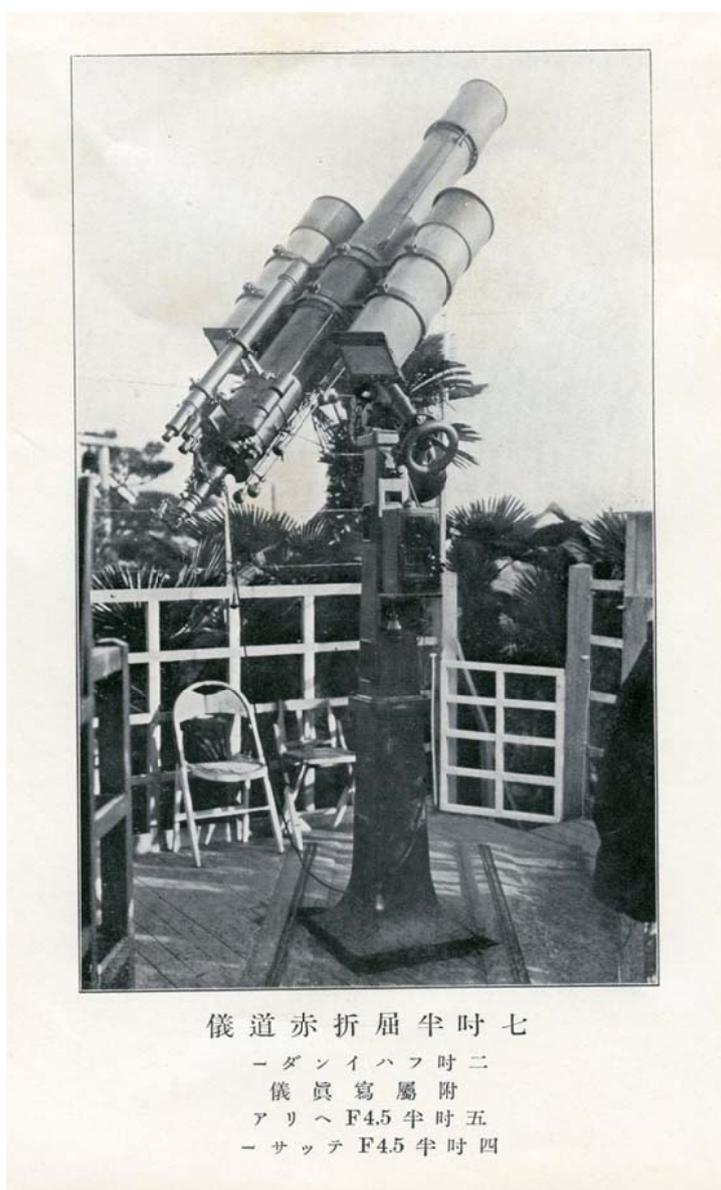


写真1 7吋半屈折赤道儀

その機材一切が1946年に東京天文台に寄贈されたが、現在ではその所在さえ明らかでない。東京天文台への寄贈にあたっては、広瀬秀雄氏が窓口で行われたようである。アーカイブ室新聞第662号では、これらの機材の一部が流星写真儀に転用されたという情報をもとに書いた。今回は一覧に掲載された望遠鏡の写真を紹介したい。

射場天体観測所一覧には、観測器械として、1) 12吋反射赤道儀（運転時計付、2吋ファインダー）、2) 7吋半屈折赤道儀（運転時計付、2吋ファインダー）、3) 8吋反射写真赤道儀（モーター運転、2吋屈折付）、4) 聯成写真赤道儀（運転時計付、案内望遠鏡4吋屈折）の4本の望遠鏡が記載されており、それらの写真が掲載されている。前頁の写真1は7吋半屈折赤道儀で、2吋のファインダーのほかに5吋、F4.5ヘリア、4吋半、F4.5テッサの2本の写真儀を同架している。レンズは故中村要氏の作、機械部は西村製作所製、

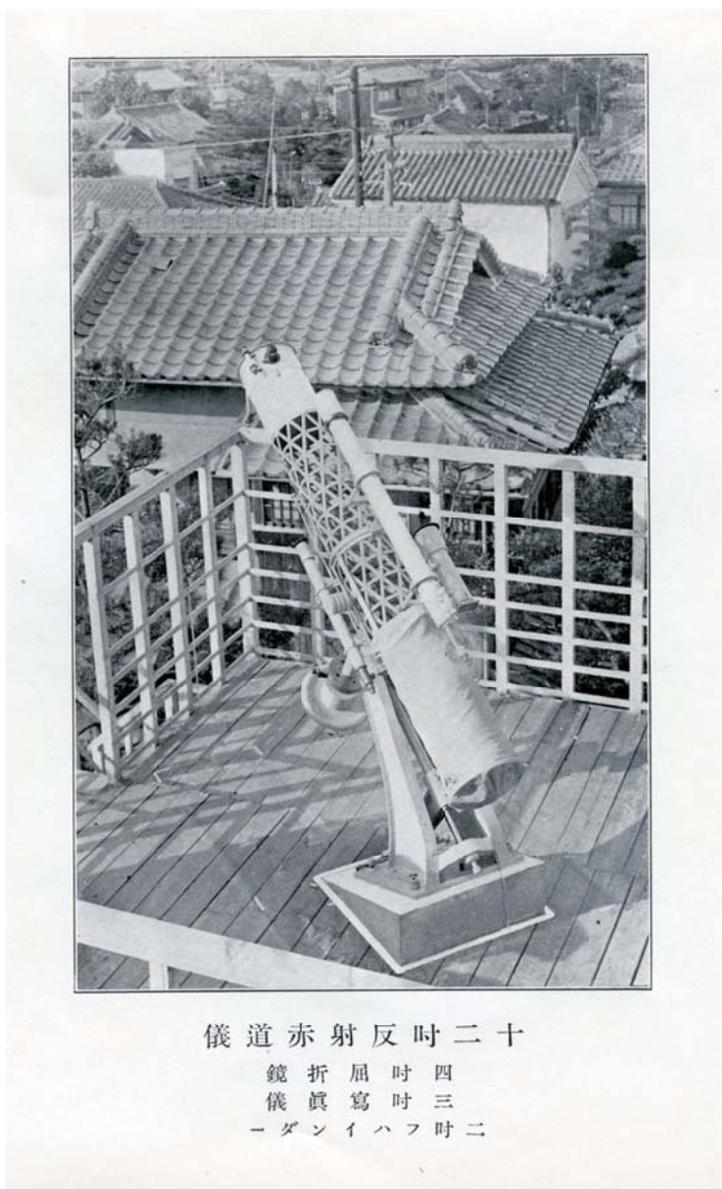
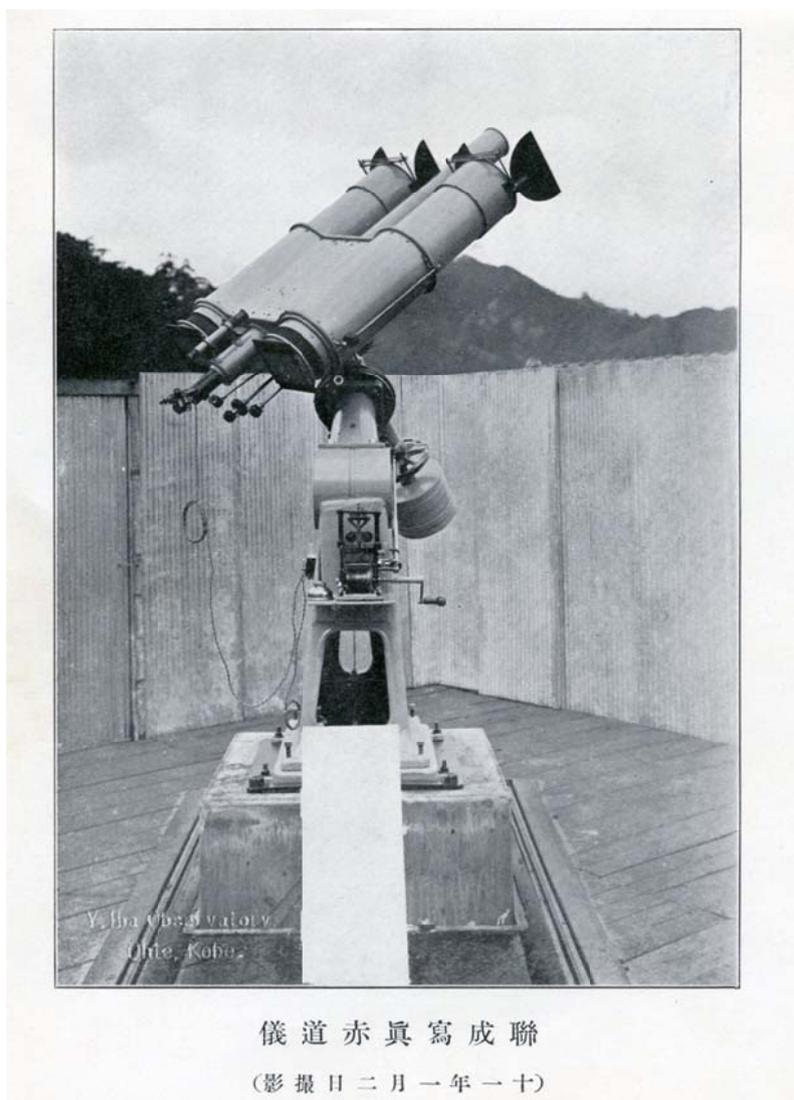


写真2 12吋反射赤道儀

諸観測に使用したとある。

写真2は12吋反射赤道儀である。ファインダーとして、4吋、2吋の2本の屈折望遠鏡があり、3吋の写真儀が同架されている。製作者はイギリスのリンスコット、鏡筒は網代型で微光天体の観測並びに掃視及び掩蔽観測に使用とある。東京天文台に反射望遠鏡が1台もなかった時代に射場天体観測所に12吋反射赤道儀が備えられていたことは驚きである。

写真3は、聯成写真赤道儀である。聯成とは2連のことであろうか。昭和11年1月2日撮影とある。写真には、Y, Iba Observatory Ohte, Kobe と書かれている。備考の欄には、3個のレンズを使用、さらに7吋半トリプレットレンズを追加予定とあり、東京天文台に現存する1台のほか、他所にないものと書かれている。



儀道赤真寫成聯

(影撮日二月一年一十)

写真3 聯成写真赤道儀

写真4が、8吋反射赤道儀である。この望遠鏡には2吋のファインダーが付いており、もっと小さなファインダーが付いているがその記載はない。8吋主鏡は木邊氏作とあり、星空及び分光写真用とある。写真で見るとニュートン焦点を使用しているが、分光写真はどの

ような工夫がなされたかの記述はない。

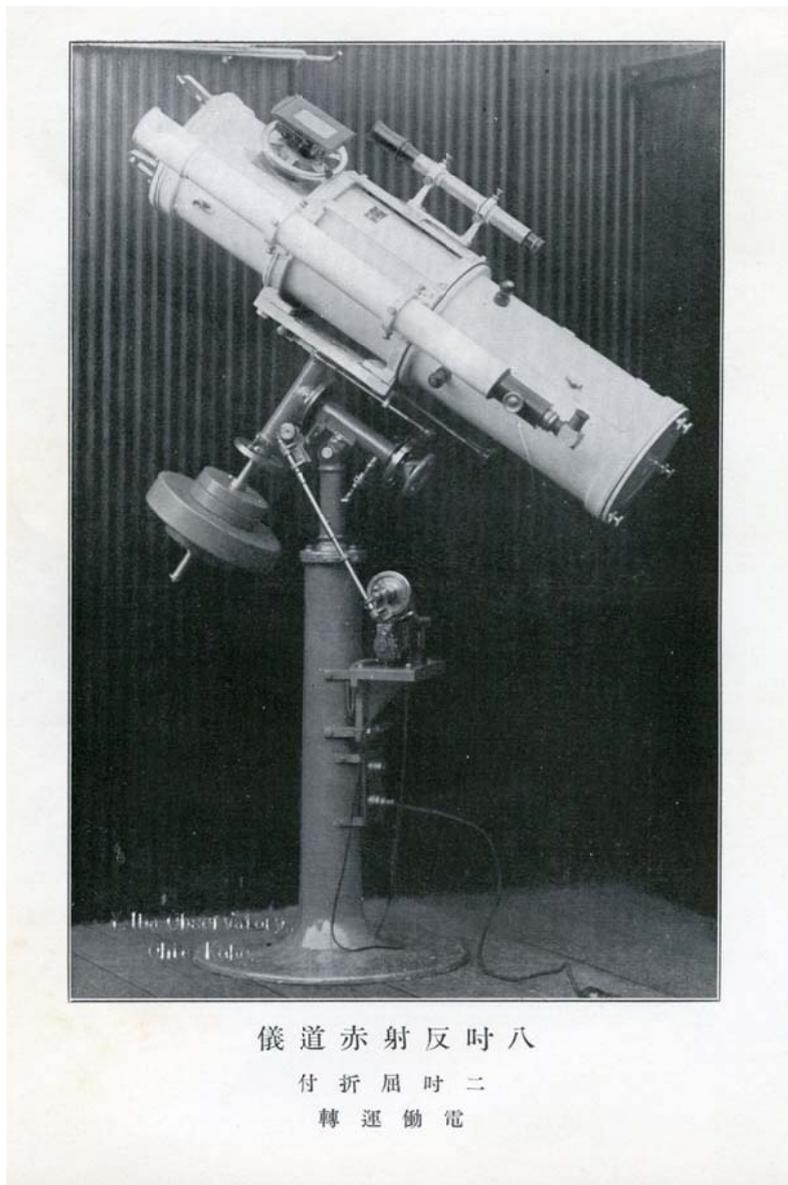


写真4 8吋反射赤道儀

この号では、一覧の観測機会として書かれ、写真のあった4台の望遠鏡に就いて書いた。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp